

念仏踊りの現在とその民俗継承 — 長野県下伊那郡阿南町和合地区の事例 —

大橋 克巳[※]

もくじ

はじめに 和合地区の位置と歴史

1、長野県下伊那郡阿南町和合地区とは

2、人口統計にみる和合の今と昔

- ①現在の人口統計
- ②文集「めんめろ」より
- ③昭和44年（跡見学園短大）

第一章 和合の念仏踊り

1、念仏踊りの4日間

- ①念仏踊りの準備と実際
- ②写真に見る庭入りの順番
- ③神様の盆と新仏の盆
- ④和合の念仏踊りの特徴

第二章 念仏踊りの保存と継承

1、聞き書きにみる今と昔

- ①「念仏踊りの太鼓」中村重治さん
- ②「保存会の運営と後継育成」平松三武さん
- ③「念仏・和讃」久保田勝信さん
- ④「ヒッチキ灯笼の復活」中村重治さん

2、保存会の活動

- ①「三世代継承の家」
- ②新しい和合の住人の参加
- ③保存会活動とその運営

3、継承される村の民俗

- ①村の盆行事としての継承
- ②和合小学校との連携
- ③保存会活動とその運営

まとめ

- ①これから和合地区は念仏踊り

参考文献

はじめに 和合地区の位置と歴史

1、長野県下伊那郡阿南町和合地区とは

和合は長野県下伊那郡阿南町のほぼ中央に位置する山深い村である。宮本常一は日本民衆史2『山に生きる人びと』の「天竜山中の落人村」の一節で「九州山中について落人武士の定住の多かった山中は天竜川中流の信濃参にまたがる一帯である」と述べている。西の木曾山脈、東の赤石山脈に比して山がそれほど高いというわけではないが、山のひだが多く地形が複雑で平地らしいところはすくなく、もともと交通はいたって不便であった。和合村は天竜川の支流にある和知野ダムからさらに遡行した和

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科研究生

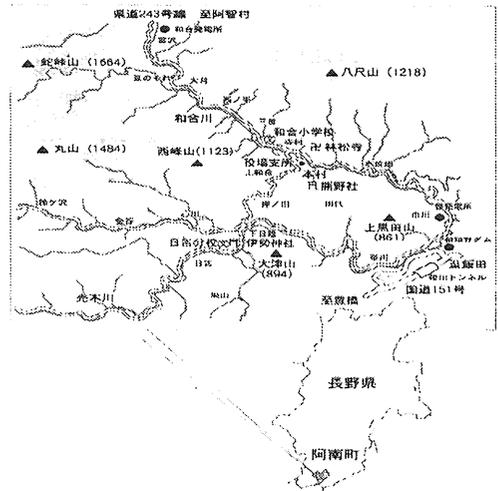
合川と売木川の川沿いに点在する17の集落からなっている。

同じ阿南町の新野が石高1000石といわれるのとは異なり和合は55石¹と米の収量はきわめて少なく山の仕事を中心である。焼畑の雑穀が中心と見え納税も大豆でよしとされていた。むしろ木材の割り当てがあり天竜川を下っていく水運と関連が深い。物資の交流も少なく自給自足の村であった。昭和10年代には燃料用の炭焼きが盛んになり各地から人が集まった。また木地職人や山仕事で盛んで人口も1000人を超えたが戦後は石油や電気へと転換するに従い現在の人口291人となっていった。

伊那街道や中山道から外れたところで他の地域との交流もままならない。長野県飯田、愛知県豊根、岐阜県中津川、静岡県天竜等へ繋がる道路事情も大幅に改善されたが、海岸部へは遠くまた首都圏へのアクセスも鉄道や高速バスに依存している。今でも全くの秘境といえる地域だ。かつては波合との婚姻関係が濃いと言われている。

和合のはじまりは落人部落である²。『阿南町史』には鎌倉騒動の時遠州から菅氏の末と言われる宮下金吾が落ち延びて来て和合を開明したとある。その後各地からの落人が集まり争いながら一緒に定住するようになった。そのため村の名前を「和合」としたとある。今でも村を開明した宮下家の屋敷は本村にある。

和合地区概念図



2、人口統計にみる和合の今と昔

① 現在の人口統計

平成22年4月1日現在137世帯、男142人女149人計291人。平成20年小学生数8人、平成17年保育所児2人と大幅に人口は減少している。中学校への自宅通学は困難を伴い学業から就職の段階で地元から離れて行くのが現実である(表1・2・3参照)。

② 和合小学校 『めんめろ』(和合小学校の生徒の文集) 23号 昭和58年より

「これからの和合夢物語」(木下紀)

和合小学校の昭和58年度の児童数は本校17

表1 和合の人口統計

平成 22 年 4 月 1 日

	平成 22	平成 21	平成 20	平成 19	平成 18	平成 17	平成 16
世帯数	137	142	146	154	154	155	159
男	142	153	158	166	167	177	181
女	149	151	160	167	172	176	182
合計	291	304	318	337	339	353	362

表2 保育所児童数の推移

年度	富草	大下条中央	大下条北条	新野	和合	計
1980	33	59	51	91	6	240
1985	43	48	47	63	6	207
1990	42	55	32	50	0	179
1995	43	60	25	40	6	174
2000	49	46	31	36	2	164
2005	37	80		37	2	156

表3 小中学校生徒数

年	富草小	大下条小	和合小	新野	小学校計	中学校計
昭和 45	167	319	67	223	776	477
昭和 50	138	284	58	169	649	349
昭和 56	88	221	23	134	486	285
昭和 60	113	211	18	105	447	252
平成元年	103	190	7	118	418	219
平成 7 年	84	174	5	100	363	198
平成 10	81	168	8	88	345	181
平成 15	86	132	6	89	313	176
平成 20	77	116	8	65	266	157

名、分校5名の計22名である。・・・和合小学校の児童数の移り変わりをみると、明治36年ごろは和合と日吉で120名、大正の終り頃から150名くらい。昭和6年から150名以上となり昭和11年と16年には300名を超えていた。昭和10年代は和合の最も賑わった時期で材木は燃料の木や炭、履物や下駄や御飯を入れるおひつなど多くの木工品に使用された。昭和20年代は200名位、昭和30年代になって200名を割り、昭和40年代以降は100名以下、昭和50年代は50名以下となった。

③ 昭和44年（跡見学園短大調査報告書）より

昭和44年・1969年に和合地区の民俗調査が跡見学園短期大学民俗研究部により行なわれ「長野県下伊那郡阿南町和合 調査報告書」が刊行されている。昭和44年の和合の人口は234世帯、男441人、女447人、合計918人である。

第一章 和合の念仏踊り

1、念仏踊りの4日間

① 念仏踊りの準備と実際

念仏踊りの装飾・道具や装束は和合念仏保存会で整えられ、新たに建てた「でんでこ館」に保管されている。現在30人弱の役員構成で念仏踊りの準備と実施を行っている。（参照別紙保存会名簿）構成員の男性によるもので女性の参加は行道の時に持つ花・柳の担当と念仏踊りの笛の担当であり関与することは少ない。念仏踊りの前後に林松寺の庭で行われる盆踊りへの参加が主体である。事前準備（13日昼間・はたつき）と事後清掃（17日午前）は保存会員が念仏

踊りの前後に集まり、道具の点検・補修や装束の洗濯・整頓を行う。これら準備と整頓は地元の在住者でしかできなくて他所に勤めている若者は参加が困難である。盆休み期間郷里に帰る若者を積極的に念仏踊りに参加させるべく人員のやりくり等工夫しているが不安定な参加となっている。

17地区の内現在和合の念仏踊りの保存地区に参加しているのは押ノ田、上和合、木曾畑、鈴ヶ沢、田代、寺村、巾川、本村、宮沢、大月、西の平、三度の12地区である。和合村時代にあった帯川、金谷、黒田、心川、日吉は地理的な理由で参加していない。

まず8月13日は熊野社から行列を組んで、村の開祖「大屋」（宮下家）を経て林松寺へ踊り込む。庭入りには順序があり灯笼・旗・ヒッチキ・太鼓・やっこ・鉦・花柳の順。念仏踊りには太鼓・鉦・笛が囃子であり、掛け声に和讃・念仏が加わる。そして踊りはヒッチキ・太鼓・やっこ・鉦である。念仏踊りの技能の習得には年月がかかる。特に太鼓踊りは和合の念仏踊りの中心であるため習得に時間がかかる。太鼓おどりは音を出すだけでなく踊りの姿も注目される。踊りは単独ではないため相互のバランスも重要である。3-5個の太鼓を激しく打ち鳴らしヒッチキが動き回り、鉦の高い金属音が響くと全体が飛び跳ねる。まさに踊躍念仏である。庭入りは念仏踊りが神社や庄屋や新仏の家へ行道しその都度挨拶するために生まれたものであろう。熊野社へは「神の前の庭褒め」、宮下家へは「大屋の庭

褒め」と和合村の神様と開明地主へまず挨拶する儀礼から始まるものはどこの地方にもある民俗儀礼の形である。和合の念仏踊りにも同じ挨拶儀礼があるのはおもしろい。

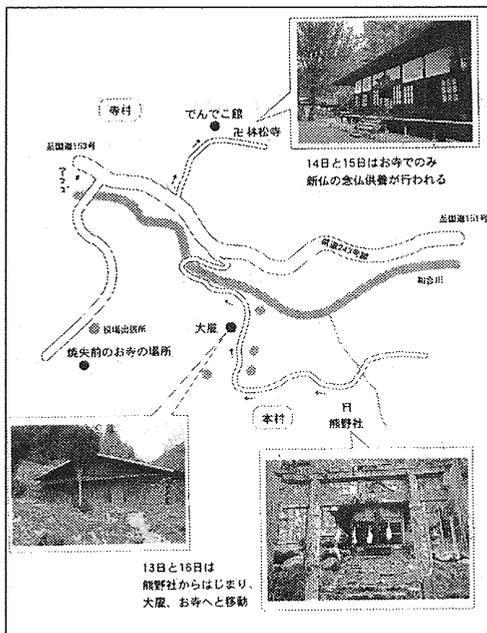
14日に新盆の家が林松寺で一緒に念仏供養をする形となっている。念仏供養として行われる新仏への念仏和讃は新仏の年齢や

死因によりそれぞれの和讃が詠われる。「野辺の送り」（天寿を全うした人）、「釘抜き」（若くして亡くなった人、事故死）、「血の池」（子供を産んで亡くなった人などが昔には多かった出産時の死）、「西院の河原」（子供の死）など。庭ほめ和讃は熊野社・大家（宮下家）で行うが林松寺ではやらない。

表4 念仏踊りの日程と行程（いずれもでんでこ館の準備から始める）

	でんでこ館	熊野社	大屋	林松寺
13日	保管・準備・装束	庭入り・念仏和讃	庭入り・念仏和讃	庭入り
14日	保管・準備・装束	なし	なし	庭入り・念仏和讃
15日	保管・準備・装束	なし	なし	庭入り・念仏和讃
16日	保管・準備・装束	庭入り・念仏和讃	庭入り・念仏和讃	庭入り

準備と行程と念仏踊り（下の地図参照）

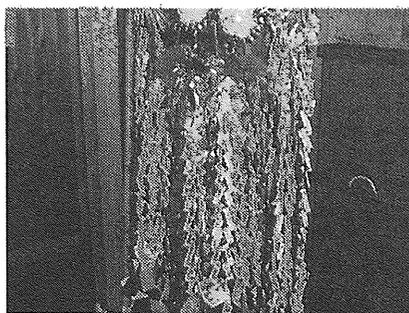
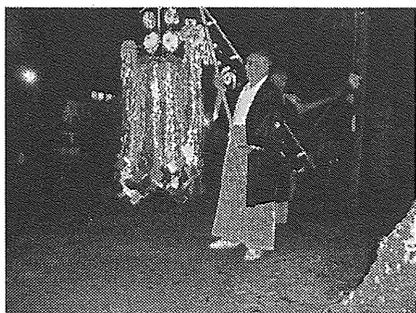


和讃の種類と対象

和讃	対象
神の前の庭ほめ	熊野社
大屋の庭ほめ	大家
野辺送り	60歳以上の新仏
釘中折れ	60歳以下の新仏
血の池	子を産んで死んだ新仏
西院の河原	子供の新仏
花和讃	生まれて直の新仏

② 写真にみる庭入りの順番

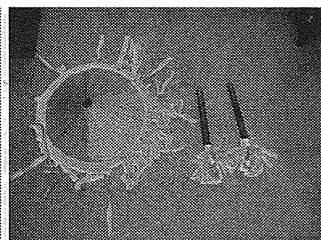
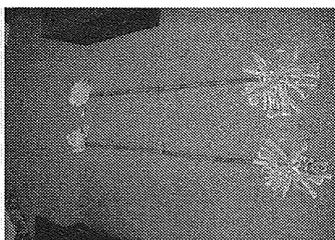
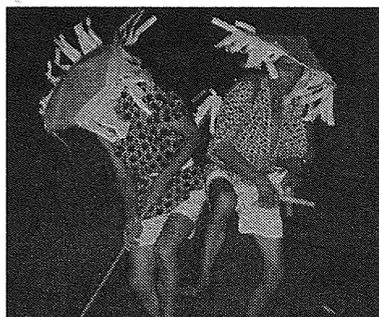
灯笼、幟、ヒッチキ、太鼓、やっこ、鉦、花・柳、笛、太鼓持ち、念仏・和讃



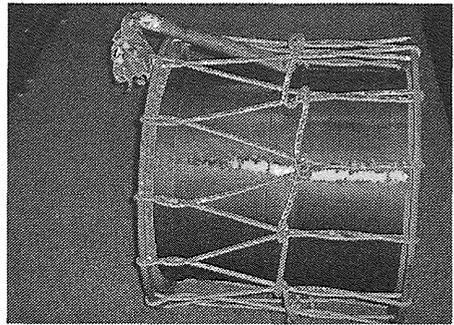
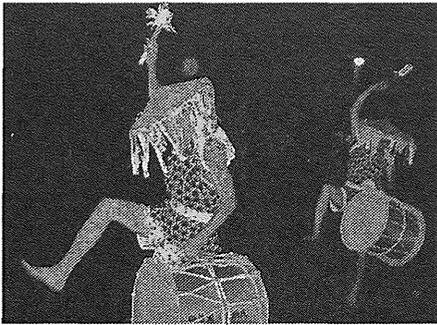
① 灯笼を掲げて最長老の中村さん80歳が先頭に立ち「ヨーソレ」の掛け声とともに庭入り。ゆっくりと念仏行道が始まる。



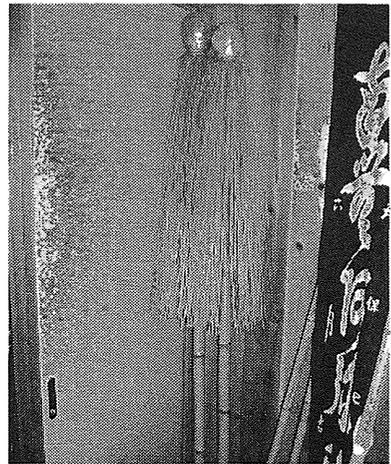
② 「南無阿弥陀仏」の幡持ちは灯笼に次ぐ二番手である。天保七申年六月の期日がくっきりと浮かぶ。最後の16日には嘗ては大屋から貰ったという「南無阿弥陀仏」の紙幟が別に加わる。



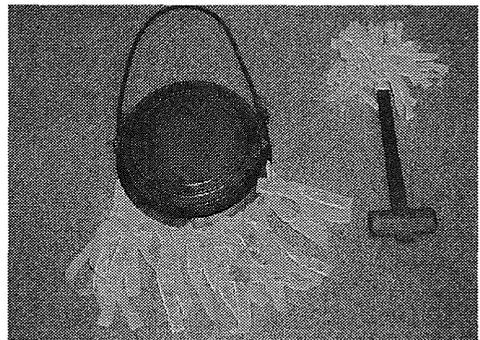
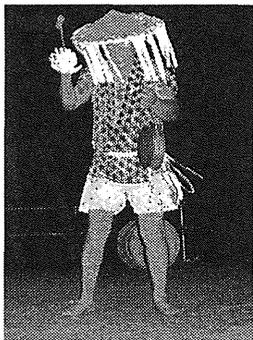
③ ヒッチキは踊り場一杯に二人一組（ささらとヒッチキ棒）でぶつかり合いながら踊るので相当激しい動きとなる。見る者にとっては楽しい踊りである。



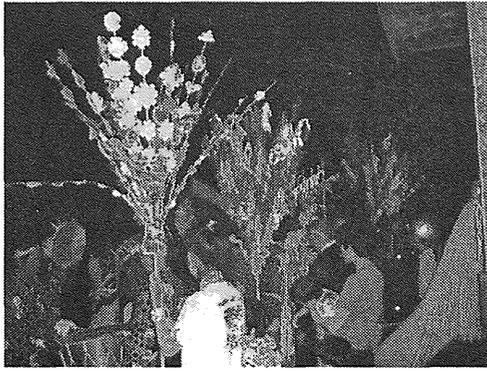
④ 太鼓はいつも3組～6組出て来る。腰のあたりに持つ太鼓は相当重い。庭入り、和讃・念仏と常に行列の中心にいて時には激しく飛び、跳ね、踊る。逆に新仏の供養の念仏と和算はしみりと称名を上げ太鼓を打つ。



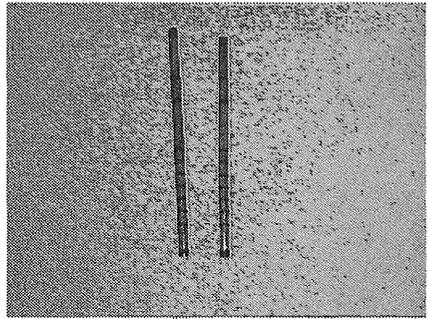
⑤ やっこは鉦と笛と太鼓に合わせて踊る。竹竿をぐるぐると回すと傘が開く。このタイミングに合わせて体を沈めたり浮かせたりする。なかなか難しい動きを要求される。飄々としていて観客の気持ちを和ませてくれる。



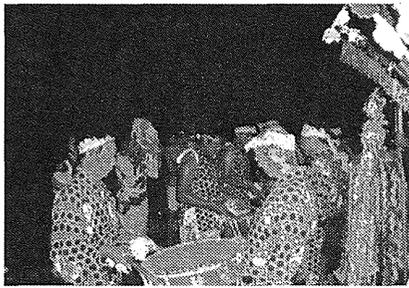
⑥ 鉦は良く響く。おどりに合わせて叩くのではなく鉦に合わせて踊る。自らも叩きながら踊るので相当な運動量となる。



⑦ 念仏行道の最後尾には花と柳が続く。和合の子供や女性たち、また観光に来て飛び入りの女性が手伝っていた。結構長い時間持つので子供には疲れと眠気と飽きがかかる。



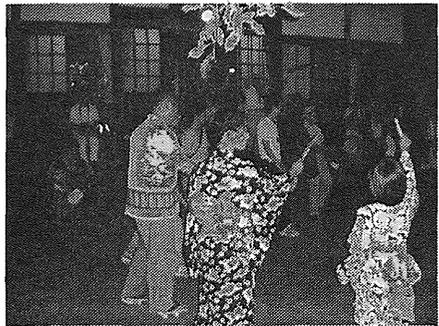
⑧ 笛は小学生のころから教わった女性が中心で吹く。いつもは普段着のままであるが地方公演で遠征するときは艶やかな着物姿に変身する。



⑨ 太鼓の打ち手は念仏を唱えながら太鼓を打つが片や「太鼓持ち」は念仏に合わせて太鼓を移動する。まったく縁の下の力もちの仕事で手の空いたひとがいつも太鼓と同数必要となる。太鼓打ち芸能の形態別分類（西角井正太氏「日本の太鼓の分類」）によると和合の太鼓は一つの太鼓（単式）を一つの音を続けて打ち（単打・連制）太鼓持ちが太鼓を持っている（抱持形・手持ち・相役打ち）という分類に分けられ、跡部の踊り念仏や遠州大念仏の据え付け形でなく、天童念仏の腰鼓形でもなく、手持ち自身打ちの六斎念仏でもない独特の太鼓打ちの形である。



⑩ 念仏踊りには必ず念仏（南無阿弥陀仏）と和讃が伴う。声自慢が音頭取りになる。熊野社での神の前の庭褒め、宮下家での大屋の前の庭入りの時の庭褒めや林松寺での新仏供養の和讃など幾種類かある。一節唄う毎に太鼓が鳴り、太鼓が踊る。声自慢の念仏衆の得意な場面である。



林松寺前庭で念仏踊りの後に手踊り（盆踊り）が行われる。村の人たちが三々五々集まり、また観光客も参加して行われる。簡単な踊りの所作と「すくいさ」や「おんたけ」「十六」などの盆唄を歌いながら団扇で調子をとる。素朴な盆踊りである。

③ 神様の盆（村の盆）と新仏の盆（家の盆）

国指定特別無形文化財として登録されている和合の念仏踊りは別表に整理した通り、「村の盆行事」と「家の盆行事」とが4日間に組み込まれた形で行われている。

念仏踊りを村の盆行事と位置付けたが、これは村の人たちが盆の時期に共同して行う民俗祭祀と言う意味で、盆行事そのものは個々の家で準備され取り行われる。しかし新仏の出た家には親族や同じ部落の人た

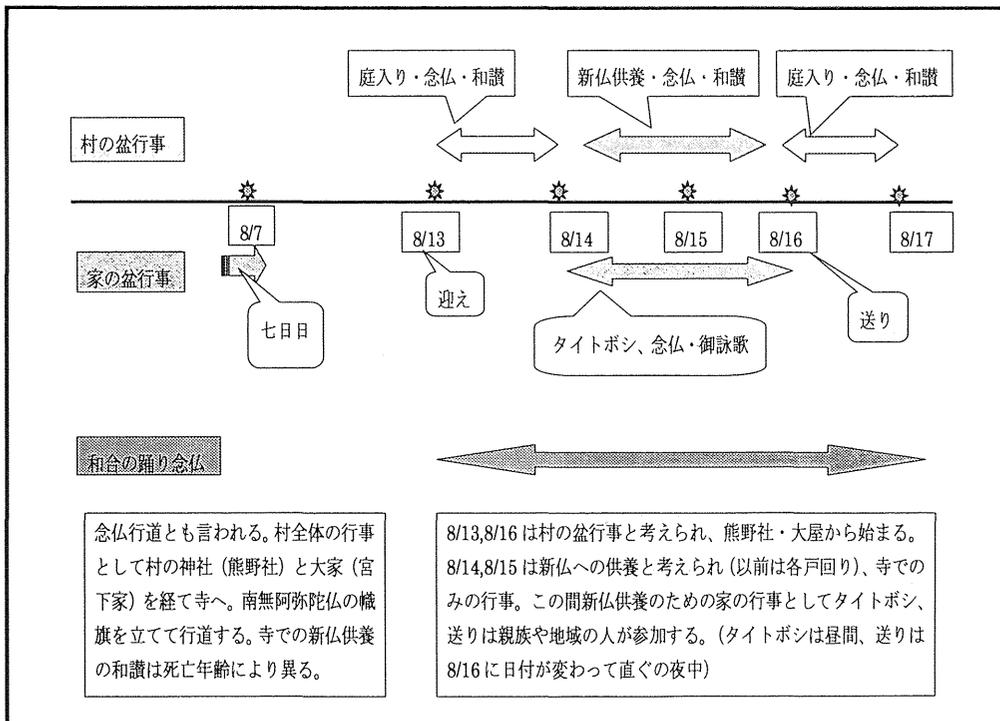
ちが参集して一緒に供養する。特に山奥の狭い山村での人間関係は多くの近親者で出来あがっている。また長い期間顔を見合わせて働き、暮らしを共にした人達の集団でもある。新仏供養は特に念入りに行われる。「タイトボシ」は8月14～15日昼間新仏の家に集合して供養する。魂送りには親類縁者や親しかった部落の人が15日の夜中に集まって念仏し、16日の未明に切り子燈籠を燃やして送る。昔はこの両日に新仏の家を念仏踊りで回ったといわれるが、当時の和合

の範囲は峠越えの日吉や幅川を含む地域であった。かなり広範囲であって重い太鼓を抱えての移動は和合村の人間関係の濃さを物語るものである。現在はこの行道は行なわず林松寺にまとめて14～15日の二日間に行なうように変わった。これは個々の家の新仏供養が対象であり祖先供養とは異なるが、新仏供養を村の盆行事の位置づけたと考えることもできる。そのため和合の念仏踊りが家の盆行事と村の盆行事を一つに繋いでいったとも考えられる。

には各戸で盆棚が作られ祖先を迎える準備をする。昔は新仏の家に近隣が集まり葦を編み、切り子灯籠を作ったという。各家では祖先と新仏を迎える盆棚を作り供物や盆花や切り子灯籠で飾る。新仏の家では14～15日の昼間供養の人が集まり念仏を唱え、御詠歌に和す。14～15日の夜林松寺の本堂には萬霊供養棚が設えられそこに新仏の野位牌が祀られ、念仏踊りの間は遺族により線香を絶やさず継ぎ足している。16日未明の新仏の送りには念仏のあとサバの缶詰のうどんが振る舞われたがその由来は良く分からないとのことであった。

8月はじめに住職により林松寺には施餓鬼会の幡が2本立つ。盆の準備として七ヶ日

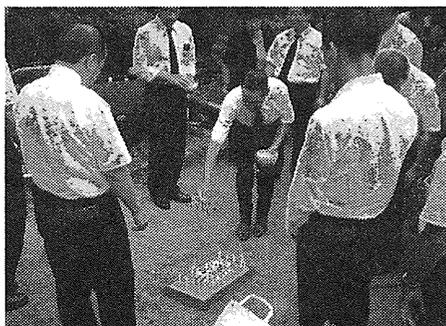
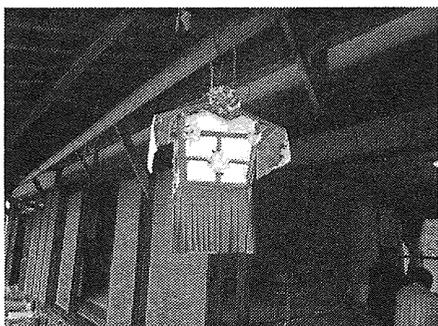
2010・9・8 大橋克巳作成 の構造図和合の念仏踊りと盆行事



各家の盆供えと新仏の迎えと送り



各家の盆棚： 名号を掛け、祖先の位牌を揃え置く。葦で編んだ盆棚を作り供物を載せる。盆花で飾る。盆の間は毎日勤める。この家では16日の朝裏山に通ずる道端に供物をまとめて送り出した。以前は川に流す家も多かったが今は家の近く裏山などに出す。



新仏の家には「高灯籠」が作られていた。写真は子供の作ったものであるが嘗ては各部落の手による家紋入り灯籠が供えられた。新仏の供養は家族・親族・近隣の人が集まるが親族や地域の関係者のみで僧侶はいない。念仏・御詠歌に引き続き参加者全員による「タイトボシ」という儀礼が屋敷口で行われる。米粒の入った箱に108本のろうソクを立て、念仏を唱え、水を掛ける。昔は門口から玄関までの道筋に108本の蠟燭を立てて送ったと言われている。



16日の未明に庭に出て念仏を唱え、切り子灯籠を焼いて仏を送る。現在では親族から新仏供養の切り子灯籠が寄せられる。ほとんど新野の仏具屋や農協（JA）からの取り寄せであるが二万円位の豪華なものである。昔は切り子灯籠を村ごとに手作りした。

④ 和合の念仏踊りの特徴

佐々木勅さんは念仏踊り保存会の前会長である。体を気遣って今は4日続けての参加はできないが保存会活動には常に参加している。念仏踊りの特徴を次の様に話してくれた。

「和合の念仏踊りは遠州の大念仏踊りが伝わり伝承されたのだろうとも言われています。しかし、大念仏と比べて、仕度（したく）が違い、バチが違い、踊りが違います。特に『ヒッチキ』という踊りはここ（和合）の他にはありません。ここだけで250年以上続いています。私は念仏踊りが一番正統な形で伝わったのは和合だと思っています。私たちの代で絶やす訳にはいけませんので小学校の子供たちに教え何とか残そうと努力しています。」

「和合には『おんたけ』という歌があります。『おんたけ』は御嶽山の事でしょうね。だから伊那節が元歌で御嶽山の見えるところで発生し、伊那谷を降りてきて最後にここ（和合）で根付いたのでしょう」

「盆踊りは男女交際の場でもあったと思います。いや、盆踊りが唯一交際の場であったのかもしれませんが。当時としては村祭りの本来の姿であったはずです。昔は盆と正月の休みしか取れなかったので待ち遠しかったですよね。楽しくて仕方がなかった。総てのエネルギーを使って踊りを楽しんだと思います。男女の出会いを心待ちにして楽しんだ。だから朝まで踊れたんです。」

「毎年、開催日は決まっています。8月13日から16日まで行われます。14日から15日はお寺、そして13日と16日はお宮で行われま

す。14、15日はお盆で地域の皆さんは忙しいから、13日と16日に多数が参加しました。見学するならこの日がいいでしょう。しかし16日は仏さんがお帰りにってしまうから16日に念仏は無いです。新野に行くと仏さんが一日余分に居らっしゃる。来る日が何日かは知らないが、とにかく1日余分にお泊まりになる。その理由はお寺の関係かも知れませんね。新野は関氏との関係が深いお寺が多いです。和合は下條氏の流れを汲む子孫が多かったようです」

念仏保存会現会長の平松三武さんは、熊野社の庭入りの時には「豊年だ、豊年だとお願している」と庭入り前の挨拶で言っている。庭入りは熊野社へ最初に参り挨拶をすることから豊年祈願への与祝的なものではないか。

また熊野社から始める先祖供養としての盆供養はその狙いであり「神の庭褒め」を行道の最初に行い最終日について「念仏衆の神送り」と表現している。和合の念仏踊りの神仏習合的特徴を言い表している。

盆の期間は全体に新盆供養で覆われているように見えるが村の社である熊野社へ最初に挨拶に向かうのは村の神様と祖先のための盆であり念仏踊りと考えているのではないか。和合の念仏踊りには伝承や言説が有るが、外とは途絶しがちな山奥の念仏踊りを村の唯一の民俗共有財産として継続してきたのである。観光対象でもない単なる宗教祭祀でもない。村の民俗文化として継続している。ひと言でいえば「村の盆行事を大切に続けて来た」ということではないか。

第二章 念仏踊りの保存と継承

1、聞き書きにみる今と昔

① 中村重治さんから「念仏踊の太鼓の技」についてきく

Q: ヒッチキから習い始めるのですか

A: 太鼓を叩く前にヒッチキ拍子をやってから太鼓をやる。昔の方が厳しかった。後ろに付いて、足の踏み方や手の上げ方まで年寄が付いて教えた。

一週間ばかりトイレに行っても座れないほどしんどかった。

Q: それでも楽しいから続けたのですか。

A: そう、練習した。馬せん棒を抱えてトイレをした。昭和21年に23歳で戦地から帰国して昭和24年ごろに念仏踊りを始めた。

Q: 指導してもらった人はどのような人でしたか。

A: 後ろで見ていて文句ばかり言われて、自分では何もやらない人。

Q: いつまで太鼓をやったのですか。

A: 東京へ遠征した時（平成7年日本青年館）が最後。足を痛めてやめた。

Q: そのころ何人くらいいたのですか。

A: 習っていた頃はいつも太鼓の取り合い。太鼓の張りが良くていい音の出る太鼓を叩きたいので早く来て撥を隠していたりした。

Q: 太鼓の皮は何ですか。

A: 張替は石灰で晒し牛の皮で張替えたが、良い音がでない。やはり馬の皮の方が良い。

Q: そのころ太鼓・ヒッチキ・やっこはどうでした。

A: 太鼓も5つ位あった。

Q: 交代でやっていたのですか。

A: いまは頼んで、頼んでやってもらっている。昔は厳しく年寄が付いて教えてくれ

た。

Q: 念仏や和讃はやったのですか。

A: 私は和讃はやったことがない。

Q: 始めから念仏や和讃は専門にやる人がいたのですか。

A: そうではなくて声自慢の早く覚えた人がやっている。

まとめ、太鼓を叩く前にまず初めヒッチキ踊りを習う。若い体力のある人が望ましく特別な技ではないが棒とササラとの組み合わせとなるため2人の呼吸が合わなければうまくいかない。一番華やかで「見せる踊り」として注目される。和合独特のもので近年新聞やTV取材で取り上げられている。次に太鼓を習う。太鼓叩きは後ろに年寄衆が付いて足の踏ん張りを指摘し、手の上げ方や足の踏ん張りを厳しく指導する。自然に足や手の動きを覚えるが一週間ばかり練習するとトイレで屈めず両脇に馬せん棒を抱えてやっと座れてトイレをした。太鼓踊りは楽しいから続けられた。今80歳だが戦争から帰って24歳から始めた。昭和48年の東京公演が最後に足を悪くして太鼓はやめた。馬の皮でいい音がでる太鼓を選んでやった。いい太鼓を叩きたいから早く来て撥を隠して太鼓を叩いた。太鼓を持ちたい人ばかりで競争が激しかった。太鼓の技の把握に努めた。撥の取扱い、「跳べ」の掛声とともに大きく跳ねて太鼓をたたき続けるなどかなりの体力が必要である。また4乃至5台の太鼓の調子が揃うためには先頭のベテランと最後尾の新人とのバランスが取れると美しい。昔も今も太鼓は花形であるが同時に長い養成期間が必要となる。

② 平松三武保存会長から「運営と後継育成」について聞く

Q: 平松さんが念仏踊りを始めたのはいくつからですか。

A: えーと12〜3だな。小学校5年生位からそれまでも行道について回った。

Q: 最初は何にからですか。

A: ヒッチキを3〜4年ばかり中学になっては太鼓。太鼓が中心で足掛け50年。今64歳。

Q: 今の鉦は。

A: そう10年位。鉦と太鼓を交代でやってきた。

Q: いま鉦ばかりですか。

A: 人がいないので鉦です。

Q: 和讃はやりますか。

A: 和讃は太鼓に付けてやる。

Q: 念仏はどうですか。

A: 年のいった人がやる。

Q: やっことも、笛もやりましたか。

A: 何でもやった。年配になると灯笼や幡を持つ。まだ若いのでやらない。

Q: 太鼓をマスターするのにどのくらいかかる。

A: 早い人で5年位。感の悪い人は時間がかかる。

Q: 太鼓が4個で25〜26人の編成ですね。

A: 全部揃うには32人程必要です。

Q: 独りで何役かこなせるひとがいないと困りますね。

A: 若い人は13日がメインで、16日とその次。昔は本番の14〜15日は先輩がいてやらせてもらえなかった。

Q: いつがメインですか。

A: 13日は神社と大屋と寺の3か所でフルにやるから。

Q: 13日は会社の盆休みには少し早いですね。

A: 仕事の都合にもよるが去年は帰省の人は多かったが今年は少なかった。

Q: 4日間だから大変ですね。盆踊りは別ですが他所の念仏踊りは1日間が多いですね。

A: 和合は長いので4日間です。ずっと続けて参加するのは難しくなっている。

Q: 結構工夫がいきますね。

A: 先代のときは久保田会長がすべてやっていた。大変で佐々木さんの時パートに分けた。

Q: 女性の役割が少ないですが裏方で手伝う事も出来る。

A: 笛吹きと花持ちは私の子供の頃も同じ。女性は家の接待が中心でやるので難しい。

Q: 花や柳を作るのは女性や子供がつくるのも良いのでは。

A: そうだ。

Q: 急がずに自分で準備できる切り子灯笼などを復活してもよいのではないですか。

A: そうだね。3〜4人で朝から昼過ぎまでかかる。今は作らなくなって新野から高い物を買ってくる。

Q: 小学校の校長先生の参加も影響力があり大切ですね。

A: 校長によって違うが、そうだ。

Q: 今は飯田に住んでいる宮下（大屋）さんは和合の屋敷に帰って念仏踊りを迎える。

A: 庭入りのある13日と16日には帰って来てもらっている。

Q: 平松さんがいま気を付けていることは。

A: 若い人に出て来てもらえる気分になるように気を付けている。特に13日に。

Q: 若い人の動機付けですね。

A: 毎年参加することで楽しみになる。

Q: 私が見るに、念仏踊りは熊野社も林松寺とも関係なく村の衆だけでやっている。一種の講ですね。念仏はお参りするのと同じ。日本の独特の民俗ですね。

A: 神仏混合というのか。

Q: 最初と最後に神社とお寺など神仏双方へ平等に挨拶に行くのは珍しいです。

A: そうだ。

まとめ 踊り念仏は8月13日から16日の4日間ほぼ同じ内容の儀礼が執り行われる。ヒッチキ、太鼓、鉦をマスターするには人にもよるが5年もあれば出来る。念仏和讃は歳をとった長老がやっていたが今は若い人もやっている。編成にはヒッチキ（2～4人）や太鼓（3～6人）と太鼓持ち（3～6名）、また鉦（1名）とやっこ（1～2名）、その上に念仏・和讃の詠い手（1～2名）が最低必要で4日間の参加が求められる。近くの市町村や他県への就職者を含め盆休みの期間すべてを和合の念仏踊りに費やす必要がある。日ごとに役割表を黒板に書き出し確認する。念仏踊りの各パートの習得者は限られた人たちで2009年は4日目に有力会員の家族に不幸が発生したため直前の役割組替えが大変であった。また2010年の最後の16日は月曜日であって参加できる帰省者が少なく太鼓とヒッチキを減らすことで凌いだ。4日間通して常に参加できる中核会員の高齢化が進み、一方では会員の子弟の地区外への就職や修学等がますます増えてきている。そのための対策が採られているが念仏踊りの編成に25人から30人が最低必要である。高齢者の欠落（久保田さんの例）などで人員

の余裕が無くなっている。最高齢は灯籠を持つ中村さん（80歳）で久保田さん佐々木さんは参加が難しくなってきた。一方新会員として移住者の小椋さん、吉田さんがいて念仏踊り保存会の中堅になってきている。いずれにしても念仏踊りの運営は難しい状況に差しかかっているとみることが出来る。

③ 久保田勝信さんから「念仏・和讃」について聞く

Q: 私は昨年から和合に来ています。こちらでは念仏踊りがしっかりやられていて念仏も和讃もあります。久保田さんは声が良いですね。ずっと長くやっているのですか。

A: 50年間位です。今85才の大正の生まれです。

Q: ずっと和合にお住まいですか。

A: 兵隊に少し出ただけですとずっと和合です。

Q: 何歳から念仏踊りをやったのですか。

A: 物心ついたときからで、親についてやっていた。最初は太鼓の練習からやった。練習ばかりやりましたが夜には本番の太鼓が無くなって叩けないのです。

Q: そのころ太鼓は何個あったのですか。

A: 8個ぐらい。

Q: 練習はいつやるのですか。

A: 盆の前と盆の間中は練習をやった。若いころは本番はやれませんでした。

Q: 太鼓は長くやるが、他の物は。

A: 他の物もやりました。

Q: 昔からヒッチキ踊りはあったのですか。

A: あった。

Q: やっこは傘を振り回しているがなにをして

いるのですか。大名行列のように先頭にいないのですが。

A: いつの時代からかは知らない。

Q: 順番は変わっていないんですか。

A: 変わっていない。

Q: 庭入りの後に庭褒めなど神社や大屋への挨拶がある。面白いですね。

A: 熊野社や大屋のふたつだけ。

Q: 昔やっていた新仏の家も庭入りはやったのですか。

A: やった。辻毎の地藏様の前でもやった。順番に夜通し廻りこの上（木曾畑）に帰って来る頃には夜が明けた。

Q: 14～15日に各家にいったのですか。

A: そうだ。今は14日と15日に林松寺でやって家には行かなくなった。

Q: 和合では7種の和讃をやる。結構覚えるのが難しい。七つ全部やったのですか。

A: 私は出産で女性が死んだらやる「血の池」はやったことがない。「あじけないぞよわが母は、五段の紐の解け・・・」、やらないから忘れてしまった。

Q: 今では出産の母親の死や若者の事故や病気の若か死が減りました。

A: そうです。

Q: ところで、信州大学の杉村先生の記録には和合の念仏には1～6種類の旋律があるようですね。念仏としては4種類ですか、それとも途中でかわるのですか。念仏には何種類かの旋律があるようですね。

A: そうです。いろいろやって、終りに「なみだんば・・・」で一区切りして次の節に移る。

Q: 同じ文句ですね。調子が少し変わるだけ。

A: 少し変わるがやっていてあまりそのことは気付かない。

Q: 音頭取りが切り出して、一緒にやって、最後に「なみだんば」と続く。

A: そうです。

Q: 調子が変わる、文言が少し変わる。念仏と踊りが連動する。踊りの足とリズムが連動する。和合の念仏はずいぶん長いです。節や調子は変わってきましたか。

A: 長いです。念仏だけで1時間近くもかかる。太鼓持ちも大変だ。40年近くやっているが変っていない。

Q: 行道していた時代には新仏の家での庭入りと和讃は何をやるのか。

A: 庭入りは同じ、いくらか庭褒めを付け加える。

Q: なにか褒めることを見つけないといけませんね。屋号をみんなもっている。

A: その家の庭褒めを先達が考えてやる。先達が好きな事をいろいろ考えてやる。ここでも全部やると1時間以上かかる。いやになる。

Q: 新家の庭褒めをやるのに新しく何か考えてつくる。だれかが考えたのかな。

A: ……。

Q: 盆の時林松寺で皆の参加で供養するのは良い事ですね。

A: 昔庚申堂でも集まって年寄がやっていた。

Q: 念仏講はあったのですか。

A: あったけどやめた。後継がやらなくなった。

Q: 念仏踊りにご婦人が出てこないのは不思議です。

A: 昔から男だけでやった。

Q: 笛と花と柳持ちだけですが和讃にも参加出来そうですね。

A: 女の人にやれといっても、えらい（しんどい）といってやれない。

Q: 女の方は嫁に行くから。

A: 一生懸命に覚えても嫁に行ったら何もなくなる、男の子は外に出ても帰ってくる。

Q: 三代継承の家の顕彰額がありますが和合では念仏踊りが良く継承されていると思う。本当に難しいですね。ところで大昔は旧暦の7月13日にやっていましたね。

A: そう、新暦の7月13日にやっていたが供え物の野菜が取れないなどの理由で大勢が賛同した新暦の8月13日に変えた。旧暦の7月13日だからといって新暦の8月13日にしてよかったかどうか。今になってどうかという話も出てくる。

Q: 和讃の上手下手はあるのですか。

A: 声がよく通ることと抑揚があるほうが良い。

Q: 歌のうまい下手は聞く人には良く分かります。

A: 下手だなといったら来なくなる。

Q: 音頭取りは何年続けるのですか、だれが決めるのですか。

A: 決まりはないがその選定が難しい。毎晩来るかどうかその人の都合による。

Q: 芸事でなくて自然に役割を決めるのは難しいが自然に決まってくる。

A: 太鼓でもそう。下手だと列の最後につかせる。鉦は一人だから難しい。

Q: 念仏和讃の後継者に久保田さんの息子さんたちはどうですか。

A: 名古屋に仕事に行っていてここにいないからやれない。

Q: 久保田さんの後に念仏和讃をやるひとをどうして決めるのですか。

A: 13日の晩に少し顔を出してやって後は残った人でやれといって帰る。

Q: 次をやる人に自信を持たせないといけないからですか。

A: どこかふらふらしていると任せられない。

Q: 和讃や太鼓や鉦などの音の記録を残しているのですか。

A: そんな物はない。

Q: 大工さんの親方と一緒にですね。

A: そうだね。

Q: 引き継いでいくことは大変ですね。

A: みんなのやっているのを見て向き不向きを見つけ出して振り分ける。それが一番です。

まとめ 木曾畑の自宅に伺い話を聞く。2008年の念仏踊りの13日に熊野社と大屋で念仏和讃を詠っていたが2009年にはその姿を見せなくなった。声の良い歌手である。久保田さんは85才の大正の生まれ、物心ついたときから、親についてやっていた。兵隊に少し出ただけでずっと和合に住んでいる。最初は太鼓の練習からで練習ばかりだった。太鼓は叩きたい人が多くいて若い時は自分の叩く太鼓が無くて本番の夜は8個の太鼓を取り合った。中心の太鼓に他が付いて動くので和讃も練習した。熊野社や大屋では庭入りの時庭褒め和讃をやった。辻毎の地藏様の前でもやった。昔は新盆の家に掛庭入りと念仏和讃をやった。次々とやると夜が明けこの上（木曾畑）に帰って来ると夜が明けた。

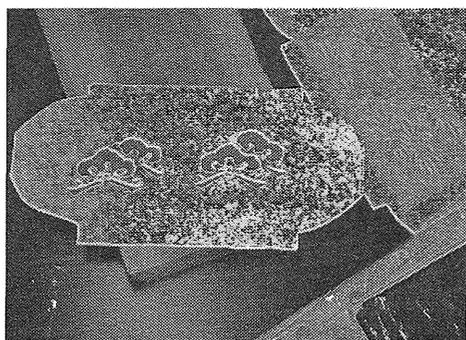
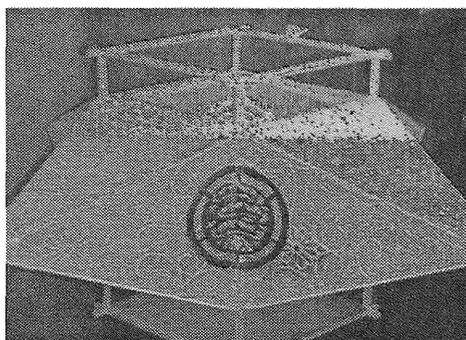
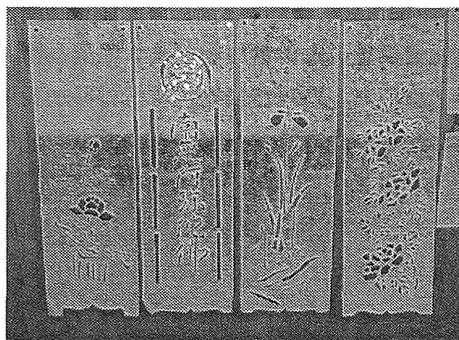
④ 中村さんと「ヒッチキ灯籠の再現」について話す

2009年に中村さんのお宅でヒッチキ灯籠の型紙を小掠さんと一緒に拝見した。中村さんの記憶では、記録の残る昭和11年の写真には無いが戦争前には切り子灯籠が林松寺にも吊るしてあった。新仏の家で切り子灯籠を吊るすのを最初誰が始めたか分からないが木曾畑と寺村が熱心であったという。木曾畑の平松さん（三武さんの祖父）あたりが他所を参考に自分たちで作りはじめたのではないかと。3～4年前に新仏が出て作ったのが最後とのこと。

部落にはヒッチキ灯籠を得意とする人がいて新仏が出ると盆用意として一日掛かりでつくったものだ。寸法は部落毎に異なり、

切り子の型紙は部落毎に得意な人によって保管されている。盆棚を作り、ヒッチキ灯籠を半日から一日がかりで用意する。

2010年7月中村さんの家を訪問した時見た型紙を使い実際に切り子灯籠を復元する試みを念仏踊りの会で行った。佐々木さんが平成6年8月7日塩沢ツナエさんから「作成の手順と概略設計図および材料」聞き書き記録を残していた。これをもとに再現を計った。ヒッチキ灯籠の設計と仕様は、20.5cmの正方形、高さ35.2cmの杉乃至桧の木枠に角が出る（これと別に会員が木枠を準備していたものを使う）。和紙に六字名号の南無阿弥陀佛、あやめ、ほたん、菊の花絵柄と欄間には松、朝顔、菊の切り子絵図。



花絵柄の裏には赤、黄、青、緑、紫の色和紙を重ねて花絵を浮き立たせる。家紋はそれぞれの新仏のものを彫りきる。15~17段の幣垂れを作り垂らす。切り子灯笼の側面の文様で和紙に図柄を切り出し、裏に色紙を貼る。色彩は花の色や草の色に合わせて「あやめ」「はたん」「菊」とあり六字名号と家紋を金で飾っている。基本的には新野の切り子灯笼を真似たものであるが部落毎に型紙を持ち、大きさもやや異なる。部落の大工や手先の器用な人が担当した。約一日がかりの手作業であった。

用意した木枠の大きさと型紙の大きさが少し異なったため、貼り付ける段階でぴったりと入らなくて結果としてうまくいかなかった。

2、保存会活動

国指定無形文化財の指定を受けているものは長野県、特に下伊那地方には多くの無形文化財がある。同じ阿南町だけでも新野の霜月祭りや盆踊り、日吉の御鋤まつり、早稲田の人形芝居などある。かつて日吉は同じ和合村であって同じ様式の念仏踊りがあったが現在は二日に縮小して行なわれている。遠く離れた和合の念仏踊りを見に来る人³は民俗文化に興味を持つ人やアマチュア写真家などであるが念仏踊りが夜間のためでもありまた常設の宿泊施設もないためその数は少ない。見学者の多くは新野の盆踊りを一緒に観光する人たちで和合の念仏踊りだけの観光客は多くない。念仏踊りは盆行事であり観光のために行なうものではないので必然的に村に住む人たちが中心となる。念仏踊り保存会の熱心な活動が今後

とも和合念仏踊りの継承の中心である。

東京公演成功祈念の念仏踊りの絵馬を熊野神社へ掲げている。（「奉献 伝承永遠に」の記事）。また念仏踊りの由来記の看板を林松寺入口へ設置し遠方からの参加者や観光客への広報活動を行っている。

盆4日間の見学者

	タイコ	地区内	地区外	合計
13日(日)	4人	10人	60人	70人
14日(月)	7人	90人	80人	170人
15日(火)	5人	40人	50人	90人
16日(水)	4人	8人	55人	63人
合計				約400人

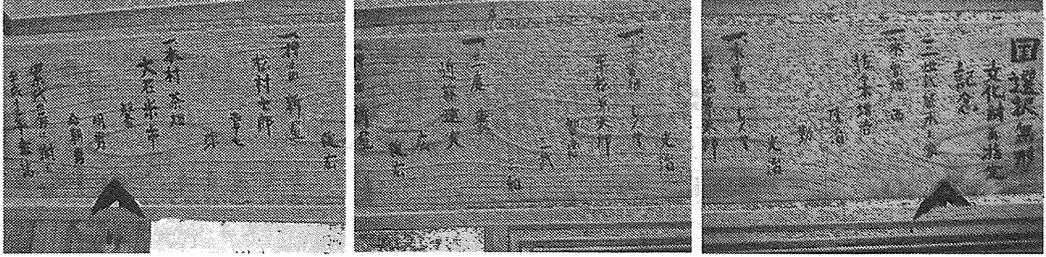
「サーヨイソーリャ」第二号 平成7年9月15日より

14・15日の参加者の多くは盆休みの帰省者や新盆供養の為の参加者および手踊り参加者と思われる。現在に比べ結構の参加者がいた。

①「三世代継承の家」という顕彰額

国選択無形文化財に指定された記念（平成12年）に次の5軒の家は三代に亘り熱心に和合の念仏踊りを支えてきたとして顕彰されている。

佐々木増吉、隆治、勤、光治（木曾畑西）、平松見太郎、智恵、三武、三和（木曾畑しんや）、近藤速実、広、俊広（三度裏）、松村七郎、幸七、弥（押の田新屋）、大石米市、馨、明男、今朝男（本村茶畑）



しかし本村の大石さんは既に他出していない。熱心な念仏和讃の歌い手であった久保田さんの息子さんたちは念仏踊りの継承者ではない。一つの村行事を継続することは難しい。

② 新しい和合の住人の参加

一方小掠さんや山田さんは他所から和合に移り来た人たちである。現在では熱心な念仏踊りの一員として参加している。小掠さんは現在奥さんと子供3人で暮らしている。有機農業を始める為和合に移り住んできた。ご両親も引っ越してこられた。現在は念仏踊りの若手活動家としてなくてはならない人になっている。奥さんも子供と一緒に参加して小掠さんの太鼓叩きや念仏踊りをいつも熱心に見ている。子供3人も将来は念仏踊りに加わることが期待出来る。また吉田さん夫妻も他所から移住して来た人だ。吉田さんは太鼓、奥さんは笛を担当している。奥さんは小学校へも出かけて小学生に笛を教えている。このように新しい住人の参加が一方にはあるが全体には徐々に高齢化している。何代にもわたり念仏踊りを継承できなくても和合の住民がより多く参加できるようになればいつまでも続けることができる。

③ 保存会活動とその運営

(1) 運営資金など

和合念仏踊り保存会の年会費は130戸均等割り1000円が基本。その他公的支援としての地域支援金（2006年には冊子印刷費として63万円）、念仏踊り会場での冊子や扇子・うちわの販売、青年部による飲食品販売などの利益、また阿南町よりホームページでの広報活動や8万円の支援などある。道具や衣装の購入や補修・洗濯費、準備会や反省会の費用、念仏踊り終了後の慰労のための飲食、来訪者のための駐車場確保の費用など。活動総計は数10万台といったところで慎まじやかな支出が続く。また念仏踊りと手踊りの場として林松寺の庭の整備がなされていた。当日の会員の負担は準備から踊り念仏、その後の片付けまで総日数は6日から7日。事前の役割個別練習は3回程度おこなう。(別掲の保存会の組織図。念仏踊りの役割図参照)

基本的にはあまり大きな支出を伴わない運営であるが他所への公演収入があった場合の会員個人への還元には参加者間で差別が発生するため抵抗が大きく、今はすべて会への組み入れと変えてきた。また広報活動は会員のモラルアップに通じ、地方紙や

雑誌、TVなどへの露出に努めている。国や地方からの支援を期待するが、下伊那郡や阿南町には和合以外にも民俗芸能が多く、その中で分配になるため町の小さな予算には期待できないのが現状である。

(2) 公演と広報活動⁴

「サーヨイ ソーリヤー」 第三号 平成8年1月21日より

和合の念仏踊り熱演 全国民俗芸能大会 東京ひのき舞台で

阿南町和合に古くから伝わる国選択無形民俗文化財 県指定無形文化財「和合の念仏踊り」は九日、東京の神宮外苑日本青年館ホールで開かれた第四十五回全国民俗芸能大会に出演。全国各地から訪れた千余人の観衆を前に「庭入り」「ヒッチキ」のダイナミックな技を披露し、盛んな拍手を浴びた。

今、伝統の念仏踊りが面白い。

推薦者は民俗芸能研究家で大会企画委員実践女子大学教授三隅治雄氏、「和合は雪祭りでも名高い阿南町の一角を占める和合川の溪谷沿いにある村落で、毎年八月盆入りの十三日に青壮年が寺に集まって道具を整え、提灯、灯籠、旗、ササラ、ヒッチキ、笛、太鼓、鉦、ヤッコ、花、柳の行列をなして氏神熊野社へ参り、庭入り、念仏、神の庭ほめ、和讃を奏する。白眉は庭入りの踊りで、シテ笠をかぶった男たちが体を屈伸させ、足を大きく跳ねつつ太鼓を打つ動きは豪快だ」などと解説を述べた。このあと、緞帳が上がって、佐々木保存会長をはじめ三十一人のメンバーが演技を披露した。いつもは四個か五個しか出ない太鼓だが、こ

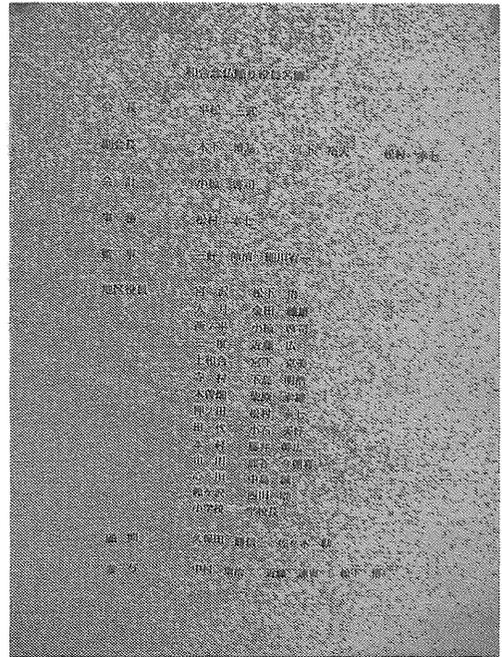
の日は七個が勢ぞろい。十五分あまりの熱演に汗びっしょりで、観客席から「素晴らしい演技を見せてもらい感激だ」との声も漏れ、大きな拍手が沸き起こった。出演したメンバーも「三十数回に及ぶ地区外の上演を経験したが、いままでにない最高の出来ばえだった」と、満足げな表情を見せていた。また、この度昭和二十八年に飯田市の常盤劇場へ初出場以来実に他地域へ出演三十有余回を数えますが、その折りの記念写真やその折々の参考パンフレットを冊子にまとめ50部の限定で発行しました。

(3) でんでこ会館

でんでこ館⁵は和合念仏踊りの為に建てた会館です。でんでこ館に会員が集まり念仏踊りの打ち合わせ、役割表作り、衣装や道具調べ、林松寺庭の掃除など保存会のみなさんによる補修・保管・補充がなされる。念仏踊りの期間中はでんでこ会館で装束を整え熊野社・大屋へ出かけて行く。

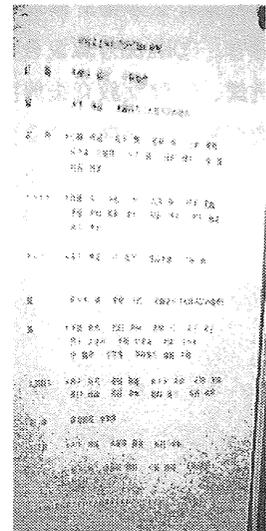
会長	平松三武
副会長	木下博基、宮下裕夫、松村幸七
会計	小椋啓司
事務	松村幸七
監事	稲垣武男、細川宥一
地区役員	宮沢 松下悟 大月 広田善司 西ノ平 小椋啓司 三度 近藤広 上和合 宮下克美 寺村 三好伸清、下島明浩 木曾畑 平松一男、柴原幸雄 押ノ田 松村幸七 田代 吉村廻 本村 佐々木五百重 巾川 熊谷今朝喜 鈴ヶ沢 西川勉 学校 学校長
顧問	久保田勝信、佐々木勅
参与	中村重治、近藤速実、松下悟

(4) 和合念仏踊り保存会役員名簿

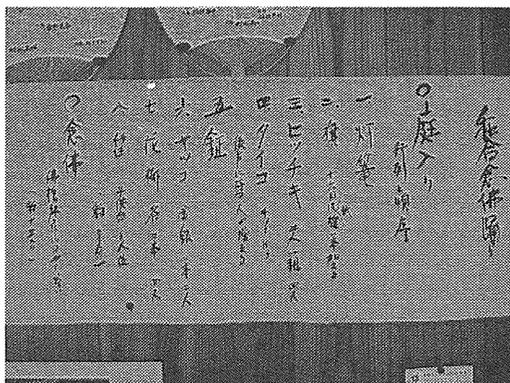
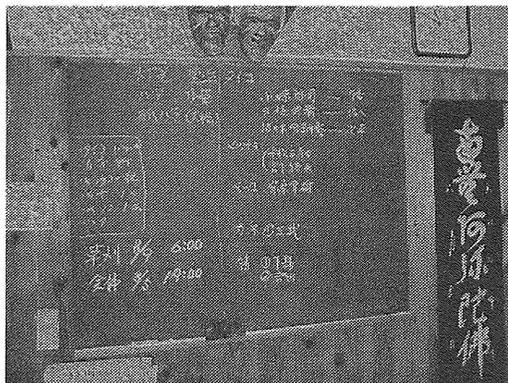


役割配分表 庭入りにおける行列の順序と役割

	役割	氏名
1	灯籠	久保田勝信、中村重治
2	旗	近藤速実、木下博基
3	ヒッチコ	近藤広、平松三和、吉田修、伊東光浩、平松大和、松村幸七、松沢博光、宮下裕夫
4	太鼓4-8ヶ	松下悟、小椋啓司、松村弥、三好伸清、佐々木今朝登、宮下勝、前沢保人、中謙二
5	鉦	佐々木清、平松三武
6	ヤッコ二本	木下博基、中次男、柴原幸雄
7	花・柳各二本	保育園、小学生
8	笛8人位	広田善司、下島明浩、吉田弓、木下孝子、宮下小きみ、平松いずみ、松沢さつき
	太鼓持ち	宮下裕夫、金田鐘雄、佐々木光浩、石田光善、井口政治、松村幸七
	和讃	久保田勝信、木下博基、松村幸七
	念仏	久保田勝信、松村悟、小椋啓司、下島明浩、松下弥



(5) 念仏踊り当日の役割表 (左) と役割配置作業 (右)



3、継承される村の民俗

① 村の盆行事としての継続

「和合念仏踊り保存会役員」(前掲名簿) による4月十一日の総会において次の方が役員となった。任期は、三カ年間。また念仏踊り保存会事業計画として①盆唄のテープ録音、②R153号線波合村へ念仏踊りの看板設置、③僻地教育振興協議会下伊那支部総会が和合で開催されるのでその出演7月4日、④国無形文化財指定陳情、⑤会報発行年4回、等の保存会活動計画を策定している。

(「サーヨイソーリャー」第五号 平成8年5月1日より)。

また、一昨年の2009年に文化庁が「下伊那のかけ踊り」調査があった。「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」の一環として和合の念仏踊りもその調査対象であった。調査では和合の念仏踊りは対象地区の中では比較的良好な状態であるとの報告がなされている。

また継続の課題を佐々木前会長に質問し

たところ次の点を強調された。

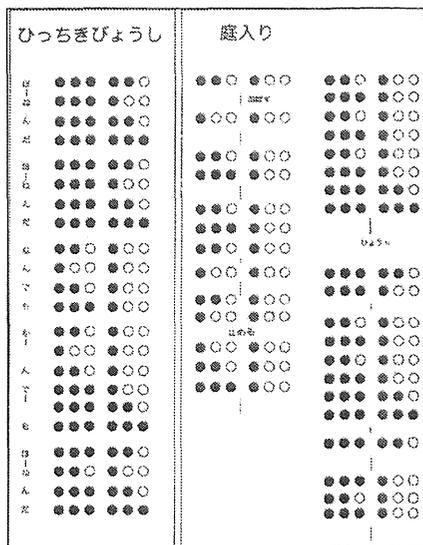
(1) 旋律、踊りなどこどもの時の習得が重要。そのため小学校との連携で毎年念仏踊りの前に笛の練習を実地している。

(2) 念仏踊りに対する個人の思いの強弱、推進する有力者や指導者の存在、地域の間人関係などがその背景にあると思う。マスコミへの露出が参加者の意欲向上には効果的であると考えられる。東京での公演の成功は今でも皆の参加意識に繋がっている。都会・域外公演による新たな関係を構築して行きたい。2010年も遠州大念仏「蝉しぐれの盆」への参加を予定している。

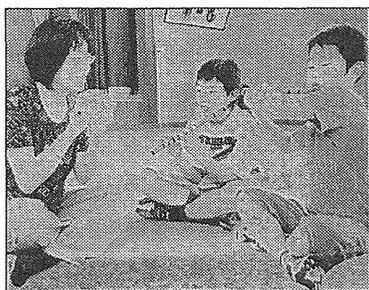
(3) 飯田周辺には芸能団体が55団体ある。芸能保持者も多い。特に阿南町は多すぎるくらいある。大鹿村は相当額支援されていると聞く。また出演者の職業による収入とのバランス、交代勤務や夜勤、また有給休暇の有無などから公演に対する金銭の配分に不平等、不公平感が生まれやすい。参加者を平等に扱い、気持ちの上でも参加意欲を維持するよう努めて来た。そのため保存



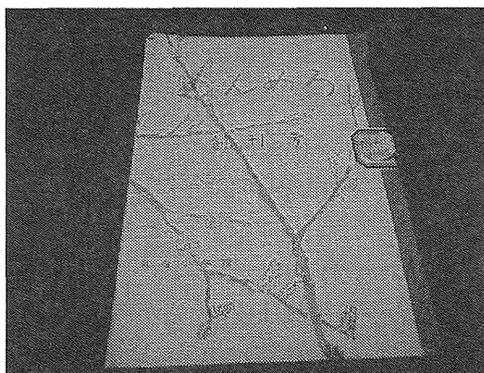
めんめろの表紙



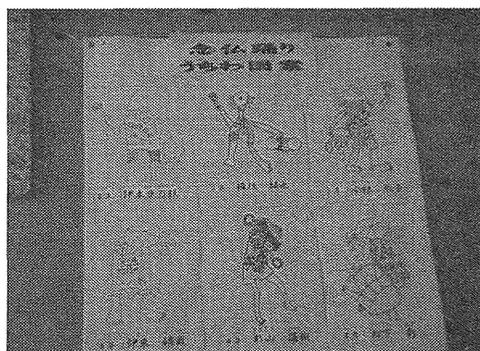
ヒッチキ拍子と篠笛の音符



笛を教える吉田弓さん



和合小学校・文集「めんめろ」創刊号。
表紙



和合小学校生徒による
念仏踊りうちわ図案

会にプールすることになっている。

② 和合小学校との連携

和合小学校は2009年現在生徒8人（長野県で2番目に少ない小学校）。念仏踊り保存会は念仏踊りの継承のための活動を和合小学校で行って来た。昭和61年以来学校行事記録として佐々木さんの指導の下に「笛」の練習会を毎年4年生以上が行っている。そして生徒は念仏踊りで大人の中に入り笛を吹く。また近年林松寺の屋台で販売している盆踊りに使用するうちわのデザインを小学生が担当している。

(1)「めんめろ」は和合小学校の生徒でつくる文集で創刊は昭和46年である。表題のめんめろは早春の花の名である。50年も続く山奥の素朴な村の小学生の文集の中から念仏踊りに関係するものを抜き出してみた。

めんめろ18号（昭和54年）四年 伊藤淳
「念仏おどり」より

七月十五日に念仏踊りをやった。ぼくはお寺でふえをふいた。いつもとちがって人がたくさんいたからどきどきした。十五分くらいまたされたので頭にきた。さいしょの庭入りは、むずかしかったけど、えらくなかった。でもあとのヒッチキびょうしは庭入りの全く反対だった。学校へ来て田中先生から念仏踊りのすった新聞をもらってまた頭にきた。それは、ふえをふく人が十二人と書いてあってぼくたち四年生が入ってなかったからだ。ぼくたちもいれてほしかったなあ。（さんざんれんしゅうをして、いっしょうけんめいふいて、そして新聞に

のったと思ったら、なかまはずれとはねえ・・・先生のコメント）

めんめろ39号（平成11年）六年 平松大和
「念仏踊りの一日」より

「念仏踊りをしに山梨に行きました。・・・ゲームをやっているうちに、バスは山梨文化ホールに着きました。練習をするまで部屋で待っていました。少し時間があつたので中を見学しました。客席が二階にあつたので、二階に行ってみました。「こんなかんじなんだなあ」と思いました。もどってリハーサルの準備をして、ステージに行きました。・・・リハーサルが終わつたのでワークショップをやる時間まで休みました。そして会場に行きました。人の話を聞いてから踊りをしました。少しきんちようしていたけど、だんだんおもしろくなってきました。八回くらいやってもどりました。なかなか楽しかったです。・・・その後公園で鉄棒あそびをし、交流会があり、料理をたっぷりと食べ、大きな肉を食べたら超うまかった。・・・ホテルのカギはカードでした。やっぱりビジネスホテルだなあと思いました。部屋で真理さんや涼介君と遊んで九時に部屋に戻る。お父さんはまだ帰ってきていないのでテレビを見ながら待っていた。11時ごろ帰ってきたので寝た。とてもつかれた。」

まとめ これからの念仏踊り

和合の念仏踊りは「村の盆行事」であり「村の民俗」である。村の住民が地域に根ざす民俗文化を継続するべく努力している。そこには二つの大きな壁が現われている。

一つ目は過疎化と高齢化の問題である。特に村での子供の定着が難しくなってきたことから教育や就職の影響が重くのしかかって来ている。新たな住人の参加がどうしても必要である。「これからの和合地区は」として関係者の座談会が記録されている。

Aさん： 阿南町のIターン率は和合が一番高いんです。高齢化率は年齢だけの数字を見ても駄目だと思います。ここ（和合）では、皆さんはご高齢にもかかわらず元気に現役で頑張っているらしいですね。それが大事な事なんです。これからの地域は集落単位でもって色々と考えて行かなくては駄目ですね。集落単位で考えないと、文化や村里を守っていくことができません。災害の時、一番頼りになるのは隣人、そして集落の人。地域内でのコミュニケーションを大切にしないといけませんね。

Bさん： 定年になったら帰って来て住みたいと言っている人がたくさんいます。

Aさん： 定年になったら、生まれ育った故郷に帰りたいという人は増える傾向にあります。その人たちが地域に根付いてくれるとありがたいですね。本当の住民になってくれますから。

Cさん： 都会に行って奥さんをよそから貰うとなかなか帰ってきてくれません。（笑）

Dさん： そうでもありませんよ。吉田さんのような例もあります。要はやり方次第です。退職者はこれからどんどん増えますから、帰って来てもいいという気持ち

ちにする方法はいくらかでもあるはずですよ。今のうちから和合の魅力をどんどん発信していかなければいけません。

Aさん： 先ほど、昔は和合に1600人いらっしやったとお聞きしましたが、どこの地域との婚姻関係が多かったのでしょうか。

Cさん： 浪合との婚姻関係が多かったですね。嫁ぎ先は浪合が多かった。嫁様は和知野から嫁いで来る人が多かったです。売木とは婚姻関係はあまり多くありませんでした。たぶん縁故関係が広がる事を昔の人は嫌ったんでしょう。婚姻によって付き合う地域が広がると、昔は何かと大変だったんです。

Eさん： 田舎暮らしをしたいなと考えている人はたくさんいます。需要もあるし、チャンスもあります。が、イザ！となると皆さんなかなか踏切りがつかないようです。

Aさん： 帰農による自給自足は今ブームです。都会の多くの人たちが田舎暮らしに高い関心を持っていますから関連する本がたくさん売れています。今から受入の間口を広げておきましょう。阿南町でも受け皿作りを考えているところです。

Dさん： 小さな集落の問題をもっと考えないといけないと思っています。山も手入れする（できる）人が減ったから密林になっているところが増えていきます。今に山が駄目になってしまいます。桑の実塾の活動が徐々に広がって、その輪がだんだん大きくなって行ってくれると嬉しいですね。

二つ目は自分たちの念仏踊り（民俗祭祀）

の参加者を増やす事が出来るかどうかである。和合の念仏踊りは観光資源としては遠距離の秘境にあり、かつ盆行事としての性格から参加者自身の盆行事や他所の盆の時期と重なり難いのである。和合の念仏踊りには芸能文化財として優れたものがあるが都会での公演や盆の時期の来場者を期待するのは難しい。特に演ずる人が専業でなく生業を持ち、また他所での就業者が多い現状では和合の念仏踊りを普及させるには相当のエネルギーが必要になる。現在保存会の行っている保存活動を継続し、技の継承者を育てると共に住民の民俗と位置づけて行くことしかないであろう。

上記のような課題を乗り越えて、また乗り越えようとして和合地区の人たちは毎年8月の盆の期間「自分たちの念仏踊り」に集まり、一緒に続けている。子どもたちへは技の伝承と念仏踊りへの参加を促している。新仏の供養も林松寺で踊念仏を修することで村の人たちが一緒に供養することに繋がる。また和合の念仏踊りは他の地域に比べて特別な観光対象でもない。広報活動を盛んにし地域の人たちだけでなく念仏踊りを芸能や観光の面で交流したい人のための活動も盛んに行っている。

芸能や観光など外へ向う面と地域の交流を深めようとする信仰面の両面を意識した和合の念仏踊りとなってくる。自分たちの念仏踊りを如何に見せながら踊るかが常に同居する。また長期的には婚姻や農業や山仕事などの生活・生業分野へ新しい人を誘い移住を進める。その結果が祭りの人的資源の充実へとサイクルが回るように日々努

めている。

このように見て行くと山深き和合地区という小さな集落を維持し多くの人びとに和合を知ってもらうためにも和合の念仏踊りを続けることは有力な手段となるのである。和合の念仏踊りに触れることにより多くの参加者が知らず知らずのうちに和合の念仏踊りへの愛着が生まれて来るのではないだろうか。すべてがこのような良いサイクルが生まれるとは考えられないが念仏踊りを村の唯一の民俗共有財産として継続していく過程には必ず生まれるものである。

念仏踊りを通じて「自分たちの村の盆行事を大切に続けて来た、また今後も続ける」という和合地区の人たちのメッセージが浮かんで見えてくる。

参考文献

- 『山に生きる人びと』日本民衆史2 宮本常一 未来社
『阿南町史』長野県下伊那郡阿南町
『かけ踊り覚書』中村浩 信毎選書11
『長野県下伊那郡阿南町和合 調査報告書』跡見学園短期大学民俗研究部
『和合の念仏踊り』念仏踊り保存会編著

注

¹ 信濃国十郡高附帳（元禄之部）元禄十五年壬午年十二月

伊那郡 和合村 御料所 高 伍拾伍石三合

伊那郡 日吉村 御料所 高 拾四石五斗三升三合

伊那郡 波合村 御料所 高 五拾貳石五斗五升貳合

伊那郡 新野村 御料所 高 九百七拾四石五斗五升貳合

² 阿南町史によれば 和合の小字の部落の内、大槻・西ノ平・山度（三度）・寺村・木曾畑・上和合・中川にはそれぞれ「大家」と称する家があり、その下にそれぞれ本百姓・小百姓がいた。そのなりたちは本村（宮下家）、大槻（山名氏家臣金田氏が落ちてきて住み着く）、西ノ平（金田氏が土着開発した）、田代（新野関氏の系統。のち退出して大家は存在せず宮下家に属す）、木曾畑（近江国佐々木氏の一族が落ち来て居住する）、中川・山度（亀元元年1570年、七代目金吾が字鷹ノ巣を焼畑に切り開き、諸国より来た浪人8人を抱え置き焼畑番人としたが、天正6年1578年春皆落ち去る）、その他押ノ田尾・心川・尾曾礼・西沢は中川・三度同様の開発経緯。上和合・寺村（この部落も古く大家があり、隷属する小百姓がいた）、峯畑・矢坪・黒田（この部落も古くて全部田代と同じく被官）は本村の宮下氏に属していた。宮沢・鈴ヶ沢（明治以降の開発）

³ 盆4日間の見学者 「サーヨイ ソーリャー」 第二号 平成7年9月15日より

⁴ 和合の念仏踊り保存会は会誌「サーヨイ ソーリャー」を発行している。

⁵ 「サーヨイ ソーリャー」第六号にでんでこ館の建設経緯を次の通り記している。

「待望の伝承センター計画立案中」
「農村漁家婦人活動施設」 前々から長い間の懸案でありました、太鼓の保管場所と併せて、練習したり、支度をしたり、大事な記録等の保管場所を、ほしいということで、町当局へお願いしておりましたところ、今年山村振興事業で取り入れてくれて来年平成九年度建設となりました。一部負担金がありますが、かねてより計画しまして一年に二十万円の積立金をしています。皆さんからいただく会費が毎年二十一万円くらいです。一部の声としては、二千円の会費は、高いという意見等ありましたが、無事にお願ひして、千円より一躍倍額にして協力してもらっているわけです。「負担金200万円余」この建物の負担金が二割自己、町村三割、国五割ですので二十万円を十年間続けなくてはならないこととなります。一部篤志寄付等あれば早く借金が済みます、と訴えている。（平成8年7月1日）

⁶ 平松大和君は平松三武氏の子息で成人して現在他所に住んでいるがいつも盆には帰って来て念仏踊りに参加する。ヒッチキ踊りで激しく踊る中心人物である。若手グループは念仏踊りの夜は林松寺の前庭にテントを張り屋台を出して地域の人たちと交流をしている。ここにも念仏踊りの周辺の人達が集まって支えている。